

英語学史年表：編集と展望

林, 哲郎
九州大学教養部

<https://doi.org/10.15017/6796292>

出版情報：言語科学. 19, pp.47-65, 1984-03-31. 九州大学教養部言語研究会
バージョン：
権利関係：

英語学史年表 — 編集と展望

林 哲 郎

- I. 序論 — 編集と典拠
- II. 歴史的展望 — 時期区分
- III. 英語学史年表 (c. 800 — 1980s)

I. 序論 — 編集と典拠

英語学史は英語学的研究の歴史的展開を体系づけて、英国の文献学的思想の流れを明らかにする学問である。換言すれば、それは英国の文献学的 (philological) な資料とともに、最近の言語学的 (linguistic) な資料に基づいて、そこに現われる英国国民の言語意識や母国語についての見解・評価を発達史的に整理する研究である。英語学史を概観するためには、最初の試みとして「英語学史年表」(a chronological table of the history of English linguistics [or philology]) を編集することが必要となる。これによって、時期や時代別に、主要な文献の種類や英語学史的な「思潮」もしくは「思想類型」を理解することが容易となるであろう。

英語学史の年表を作成するに当たって、初めに注意すべきことがいくつかある。まず第一に、英語学的研究のなかでどの範囲の文献を英語学史的に有意義であるかを見定めることである。膨大な量になる英国の文献学的著作をすべて網羅することは不可能であり、また適切でないことは言うまでもない。したがって、いわゆる「標準的英語学史」という領域に関して、典型的で代表的な文献をまず採り上げなければならない。英語の音声 (綴字)、語彙、文法 (統語法) 等についての研究、つまり英語音声論史・英語語彙論史・英語辞書編集論史・英文法理論史等、英語学史の主潮に寄与するような文献を主として選ぶべきであろう。これに加えて、英語に関する一般的評価もしくは英語改良運動の文献も、基本的な資料として最初に選択することが望ましい。

つぎに、英語学史年表に加えるべき「項目」(item) としての資料が文献学的であるか、それとも言語学的であるかについての識別の問題がある。このことは、「文献学」(philology) と「言語学」(linguistics) の区別の問題に由来する。ここで、我々はつぎの例によってこの問題を一応決定しておくことにする。たとえば、18世紀初期のスウィフトの *A Proposal for Correcting, Improving, and Ascertaining the English Tongue* (1712) は、英語アカデミーを設立して、英語を洗練し固定することを提案したものである。そのなかには、スウィフトの英語についての評価とこれを改良しようとする文芸的な意図と態度を認めることができるので、これは文献学的な資料であると言える。もう一つの例として、17世紀後半に、ウィルキンズにより *Essay towards a Real Character and a Philosophical Language* (1668) が書かれている。これは当時の一般文法ないしは普遍的言語を追求するものであるが、観念とこれを表記する記号の関係についての認識がうか

がわれる。世界中の多くの国民が通信できるような普遍的な音声表記を目指しているのは、文献学的と言うよりもむしろ言語学的性質のものである。かくして、言語学的な資料は、19世紀末からのものに限定するのではなくて、すでに近代初期の音声論者のなかの見解にも見出される。以上のように、両種の資料はいずれも英語学史の文献に項目として含ませるのが適当である。

標準的な英語学史を編むために、われわれは年表の「項目」として採り上げるべきものを概略的にも決定しなければならない。そのためには、「項目」が列挙してある「典拠」としての目録を探して、できる限り英語学史の展望に有益であるような文献を調べることが肝要である。この方面の典型的な著作として、ケネディーの *A Bibliography of Writings on the English Language from the Beginning of Printing to the End of 1922* (Hafner Pub. Co., 1927) がある。この「英語関係文献目録」は、表題に示してあるように、印刷術導入の時期 (c. 1475) から1922年のあいだの資料である。それゆえ、この時期以前と以後の文献についても、主要なものは整えなければならない。標準的英語学史の領域に関する典拠を解説したものなかで、最近100年ほどの間のものについて以下説明してみよう。

(i) 英語音声学史・英語綴字法史

1. Ellis, J. A., *On Early English Pronunciation, with Special Reference to Shakespeare and Chaucer* (E. E. T. S.), Part 1 (London, 1869)

第II章は典拠 ('Authorities') となっていて、16・17・18世紀の英語の発音に関する資料を解説した英国最初のものであろう。ポールズグレーヴの *Lesclarcissement* (1530) からシェリダンの *General Dictionary* (1780) までの34点におよぶ辞書・文法書・音声論・詩論 (韻律論) を取り扱っている。

2. Jespersen, O., *A Modern English Grammar on Historical Principles*; Part 1, *Sounds and Spellings* (Copenhagen, 1909)

第I章「序論」のなかには、P 1530=Palsgrave, *Lesclarcissement* から H1821=Hill, *Lecture on the Articulations of Speech* までの文献の簡略表題が一覧の形で掲げられている。約60点を集めているが、そのなかでは近代初期の文法家・正音学者・綴字改良家・辞書編集者の著作が主要なものである。勿論、音声論に重点を置いている。特に音価推定の資料的価値について論じている。

3. Wyld, H. C., *A Short History of English* (Murray, 1914)

本論に先立って「文献目録」が掲げられている。それは I (歴史文法・英語史)、II (英語発音に関する著作)、III (15~18世紀初期の口語英語文献リスト) に区分されている。そのうち I に関

しては、OE期、ME期、ロンドン方言と文語の興隆、近代期の順に、英語史的文献と英語学研究史の両方の資料の典拠を示している。IIについて、ポールズグレーヴ(1530)からバッチェラー(1809)にいたる17種の英文法書と音声学書のリストは参考になる。

4. Wyld, H. C., *A History of Modern Colloquial English* (Blackwell, 1920)

冒頭に「典拠のアルファベット順一覧」がある。主として15～18世紀の英語史の直接的資料のための文献と、この期の研究書ならびに最近の音声史論の研究書、ME方言の考察に関する書を掲げている。全巻を通じて、資料そのものと、研究書についての解説がおこなわれている。

5. Dobson, E. J., *English Pronunciation 1500 – 1700* (Oxford, 1957) 2 vols.

表題に示された期間の英語音声の考察と解説書の説明が中心をなしている。第I巻は「典拠の概観」である。英語音声学研究史についてはもっとも権威があり、詳細な原典の解説を提示している。資料の歴史的一覧表は掲げられていない。しかし「目次」に見られる章区分と初期音声学者の分類はきわめて有意義である。I. 16世紀の小典拠, II. 16・17世紀綴字法改良家, III. 17世紀音声学, IV. 17世紀の小典拠(1. 英文典と綴字教本, 2. 外国語文典, 二言語辞書, 3. 速記術書, 4. 「同音異義語」の一覧, 5. 脚韻辞典)の順に掲げている。

(ii) 英詩韻律論史・英語散文韻律史

1. Saintsbury, G., *A History of English Prosody from the Twelfth Century to the Present Day*, Vol. I (Macmillan, 1906), Vol. II (Macmillan, 1908), Vol. III (Macmillan, 1910) (Russell, reprinted 1961)

英詩韻律の歴史的展開に関する詳細な研究である。I巻(起源——スペンサー), II巻(シェイクスピア——クラブ), III巻(ブレイク——スウィンバーン)に分けて考察している。この著者は英詩の韻律そのものの解説と、韻律研究者(‘prosodists’)による韻律理論とを区別して論じている。ことに後者を各巻ごとに、別に章を立てて解説していることは注目に値する。たとえば、英詩韻律論のはじまりは、II巻のなかの“Book V; Chapter V Prosodists”で取り扱われている。ここではホー、アスカム、ウェブ、パトナムの英詩論・韻律論が評価されている。

2. Saintsbury, G., *Historical Manual of English Prosody* (Macmillan, 1910)

上述の大著がII巻まで出版された段階で、簡略な英詩韻律論にまとめたものである。韻律そのものの発達とは別に、“Book III: Historical Survey of Views on Prosody”は約30頁の英詩韻律理論史の概観である。巻末の章の“Glossary”, “Reasoned List of Poets”, “Bibliography”(4頁)

も有益である。

3. Omond, T. S., *English Metrists in the Eighteenth and Nineteenth Centuries : Being A Sketch of English Prosodical Criticism during the Last Two Hundred Years* (Oxford, 1907)

同じ著者による *A Study of Metre* (1903) を補うものとして編まれた書である。この著書が共時的立場からの英詩韻律論であるのに対して、(3)の書は近代期の韻律論を歴史的に扱っている。「附録B」において、E. ボールトン (1610) から C. M. ルーイス (1906) にいたる韻律論書・著者の年代順一覧と解説が見られる。英語辞書に付された「修辭的文法」や「雄弁術」に関する論考も含めて説明している。

4. Saintsbury, G., *A History of English Prose Rhythm* (Macmillan, 1912)

英語の散文のリズムの歴史的な研究としては、唯一の貴重な著作であろう。注意すべきは、散文のスタイル (style) の歴史を扱ったものではなくて、その形式的なリズムに重点を置いて考察していることである。散文の形式的特徴とこれに関する理論とを合わせ論述している。

iii) 英語語彙論史・英語辞書編集論史

1. Worcester, J. E., *A Dictionary of the English Language* (Boston, 1860)

辞書の冒頭に、“History of English Lexicography”の7頁の概説を付し、これに続いて“English Orthoepists”の説明を与えている。その後“A Catalogue of English Dictionaries”の年代順による辞書の一覧表を掲げている。I. 一般英語辞書 (1499—1856), II. アメリカ英語辞書 (1793—1860), III. 語彙集 (1674—1858), IV. スコットランド語辞書, V. 語源辞書, VI. アングロ・サクソン語辞書等に区分している。英語辞書の年表としてはかなり充実していて、I に関しては124冊 (*Promptorium*, 1490 — Richardson, 1856), II に関しては31冊の表題を記録している。

2. Wheatley, N. B., “Chronological Notices of the Dictionaries of the English Language,” *Transactions of the Philological Society* (1865), pp. 218-293.

英語辞書史の研究としては最初の貴重な文献である。辞書史として必要な時代区分などは試みられていない。1. ガドフリダス, *Promptorium parvulorum* (c. 1440)~143. レイザム, *Edition of Johnson's Dictionary* までの143冊の表題年表を巻末に付している。

3. Murray, J. A. H., *The Evolution of English Lexicography* (Oxford, 1900)

『オックスフォード英語辞典』の主任編集者としてのマリーの記念講演を整理したものである。英語辞書編集の原理の展開をたどっている。章区分はないが、英国最古の注解編集以来、各時期の典型的な辞書を論じて、編集技術の進歩を明らかにしている。

4. Burkett, E. M., *American Dictionaries of the English Language before 1861* (Originally published by George Peabody College, 1936 : reprinted by Scarecrow Press, Metuchen, N. J., 1979)

アメリカ英語辞書史の数少ない研究の一つである。ウェブスターとウスター以前の辞書（第I部）と、両編集者の競い合った辞書（第II部）に分けて考察している。巻末の“A List of American Dictionaries”は年代順に56冊（1798—1860）を記録していて有益である。

5. Starnes, D. W. & G. E. Noyes, *The English Dictionary from Cawdrey to Johnson 1604 — 1755* (Chapel Hill, 1946)

英国最初の英英辞書からジョンソン辞典にいたる一般英語辞書の標準的な解説書であり、辞書研究の先駆をなす。附録III“Bibliography and Census of Dictionaries in American Libraries”には、A. 辞書史の参考文献、B. 英語辞書の版ごとのアメリカ図書館の所在を調査していて、利用価値はきわめて高い。

6. Hayashi, T., *The Theory of English Lexicography 1530 — 1791* (J. Benjamins B. V., Amsterdam, 1978 : Vol. 18, Studies in the History of Linguistics)

英語辞書の編集の理論を歴史的に考察したものである。「参考文献A」にはパークレー（1521）からウォーカー（1791）にいたる英語辞書の表題・献辞・序文・序論・指示等の資料を各辞書ごとに掲げている。

(iv) 英語一般評価論史・英文法理論史

1. Moore, J. L., *Tudor-Stuart Views on the Growth, Status and Destiny of the English Language* (Halle A. S., 1910)

英国近代期（エリオット1531—ドライデン1700）における英国国民の英語の地位・構造に関する「見解」と「評価」の史的考察である。英語の洗練・改良の問題とともに、聖書英訳論、古語の復活、新語導入の是非論についての論考も含んでいる。附録としてエリオット（1531, 1533）

～ベントリー（1699）にいたる約40人の文法書・辞書・批評等からの短い抜萃（pp. 81—173）を収めている。

2. Lyman, R. L., *English Grammar in American Schools before 1850*
(University of Chicago Libraries, 1922)

アメリカの学校教育における英文法教授の実状を1600～1850にわたって考察した貴重な研究である。附録Aの“Chronological Catalogue of English Grammars in America before 1800”はグリーンウッド（1706）からコウラン（1802）までの文献の記録である。

3. Poldauf, I., *On the History of Some Problems of English Grammar before 1800* (Pragae, 1948) : Prague Studies in English, LV.

「序論」として1800年以前の文法論の全体的展開を概観し、「英文法の諸問題」のなかで個別品詞を論じている。本論の前にブロッカー（1586）からマーシー（1799）までの英文典の年代順の一覧が掲げられていて、年代表示の後の（ ）内にはケネディーの『英語関係文献目録』の番号が記入されていて、参照に便ならしめている。合計295冊におよんでいる。

4. Vorlat, E., *Progress in English Grammar 1585 — 1735 : A Study of the Development of English Grammar and of the Interdependence among the Early English Grammarians* (Catholic University of Louvain, 1963)

第I部（英文法研究の一般的背景）、第II部（英文法分析に基づく総合）、第III部（英文法の進歩）の3部に分けて論じている。英国近代期の英文典15点（ブロッカー、*Bref Grammar*, 1586—ラウトン、*Practical Grammar*, 1734）を取り扱う。序文のなかでフンケ（O.Funke）による初期英文典研究の功績を評価し、かつポルダウフとワタナベ（渡部昇一氏）の研究書に言及して批評している。「文献目録」には参照し分析した英文法書のアルファベット順一覧による29点が記録されている。

5. Michael, I., *English Grammatical Categories and the Tradition to 1800*
(Cambridge, 1970)

文法理論の区分、品詞・語形・統語論を取り扱い、第I部（西欧の古代ギリシア・ローマと中世時代）と第II部（英国における文法範疇の発達）とに分けて論じている。参考にされた英文法書はアルファベット順に配列されている（附録VI）。写本の英文典（1～5）、印刷本の英文典（6～273）は、それぞれ内容について簡単な解説が付されている。附録VIIにおいて、ブロッカー、*Pamphlet* (1586) からロアチャイルド、*The Mother's Grammar* (1815?) までの主表題のみを

付した表が掲げられている。現代において発見可能な近代初期英文典の総合目録であると言える。

6. Aarsleff, H., *The Study of Language in England, 1780 — 1860* (Princeton University Press, 1967)

18世紀末における言語起源に関する論争からジョーンズによるサンスクリットに関する講演(1786)をとおして、*OED*の編集計画(1859)にいたる英国における文献学的研究の事情をたどっている。19世紀における知的発達と言語学的関心の推移についての解説は興味をそられる。英文法そのものの歴史に関する文献はわずかしが説明されていないが、特に古期・中期英語の科学的研究を含めて、広い全ヨーロッパ的視野から言語研究を論じているのは、きわめて有益である。

以上、標準的な英語学史を概観する目的で、英語学史年表を編むために基づくべき文献について簡単に解説を与えた。英語の音声(綴字)・韻律・語彙(辞書)・文法(統語法)に関する研究の主要な業績に関しては、これまでに列挙した「典拠」によっておおよそは知ることができるであろう。もっとも典型的な英語学史的「項目」を選び、これらを文献的思想の流れが看取できるように年代順に配列することが、英語学史の確立のための最初の重要な仕事となるであろう。

II. 歴史的展望 — 時期区分

英語研究の歴史は、最初に記録された英国国民による英語文献とともに始まったと考えられる。たとえば、西暦8世紀末ごろの『コーパス注解集』は、ラテン語写本のなかのラテン語文そのものに関する言語意識に基づいて編まれたものであった。この無名の編者の注解集は、ラテン語について古期英語の意味上の対応を与えようとした文献学的意図の現われであったと言ってよいからである。英国国民の文献学的活動への意欲は、勿論、時代によって強弱の波が見られた。そのような意欲が高揚した時期には、英語に関する認識や評価が顕著になって、一つの思想類型(thought pattern)を形づくったのである。

文献学的活動にうかがわれる文献学的意識の度合と文献学的な思想類型の顕著さに応じて、われわれは英語学史にいくつかの時期を設定することができる。一つの時期全般に看取される文献学的な思想の流れをその「思潮」(main currents of philological thought)と称するのが適当である。この思想の主たる流れとしての「思潮」は、英国文芸史・英文学史・英語史との関連に基づいて、英語学史の時期区分の特徴を定めるのに役立つであろう。

つぎに、このような「思潮」には、ただ一種の文献学的意識の特徴がうかがわれるとは限らない。前述のように、いくつかの「思想類型」が存してそれらが交錯したり、ときには相反する性質の類型が並存したりすることが歴史的にはあり得る。このように、いくつかの「思想類型」とこれが構成する時代的な「思潮」は、われわれの言う英語学史の時期区分のための基本的条件となる。

英語学史のもっとも初期を例にとって、説明してみよう。

(i) 年代 c. 800 ——— 1100

{	「思潮」	英語研究の萌芽
	「思想類型」	英語の認識、注解・注解編集

標準的な英語学史は、単に英語学史的な「項目」を年代順に配列するだけでは十分な意義が認められないであろう。英語学史は、文献学的な思想の発達を跡づける学問であるから、「思潮」と「思想類型」とによって、時期の特徴を明らかにすることが重要となる。

一般的に言って、英語学史上の思想類型は自然科学的な思想とは異なっているとされる。ジョーンズが指摘しているように、後者は思想の発達に一貫性がある、前後矛盾を許さないのがその特色をなしている。前者は、特定の時期に、同性質で同傾向の思想が一樣に見られるということは必ずしも絶体的な条件とはならない。つぎの例がこれを証明している。

(ii) 年代 1500 ——— 1600

{	「思潮」	文献学の興隆（人文主義運動）
	「思想類型」	英語非難・英語賞賛

英国の文芸復興と称される時期には、人文主義的運動が活発となり、英語評価については種々の意見があった。英語の性質はフランス語やラテン語に比較して粗野であり、洗練されていないとして、これを非難する見解があった。この風潮は、優れた文学作品が産み出され、英国が近代国家として新しい勢力を発揮しはじめるにつれて、英語賞賛へと推移していった。その途中では、非難と賞賛が混在する時期もあったのである。

さて、英語学の全史（c. 800 — 1980）を大きく二つの時期に分けるならば、つぎのようになるであろう。

(iii) 英語学全史

{	年代	中世	近代・現代
		c. 800 — 1500	1500 — 1980s
		英語学前史	+ 英語学史

この2大時期を区分するものは、政治・文化的には、チュードル王朝の初まり（ヘンリー七世の即位1485—）や天文学・航海術の発達による世界周航の実現であろう。英語学史的観点では、

カクストンによる活版印刷術の導入と初期の書籍生産（1475—90）、ラテン語辞書の編集（c. 1440—1500）、エラスムスによるギリシア語の講義（1511）等が近代期の発端を特色づけるものである。要するに、1500年を境とする英語学史の二つの時期は、文献学的意識ないしは活動が孤立的であり散発的であったことと、相互影響が強く作用して関連的であり組織的であったことによる区分としてよい。

以下、英語学史の時代的細区分を概観する。注意すべきは、一般の歴史学における時代もしくは世紀の区分と同じように、これは便宜的であり主観的であるということである。

A. 中世期 [c. 800—1500]

(I) 英語学前史

1. 早期 — 英語研究の萌芽 (c. 800—1100]
2. 中期 — 英語研究の停滞 (1100—1300)
3. 晩期 — 文献学の曙光 (1300—1500)

西洋史学の立場から、この期間全体は「中世」に包含されるのが普通である。したがって、英語学史においてもこの時期区分に合致させるのが適当であろう。英語そのものの発達の観点からは、古期英語（1. 早期）、中期英語（2. 中期、3. 晩期）の期間となる。1100年という年代は、ノルマン人による英国征服（1066）後数十年経過した時期である。英語の特徴とともに英語学史的事情にも一つの転機が見られたのは、この歴史的な大事件が生起してから少なくとも100年近い年月の経過があった後とするのが妥当である。早期には、文献学的には初期的な活動が英語研究としては萌芽の形態にあった。中期には、初期アングロ・サクソンの文献学的伝統は大事件によってむしろ中断された。1300年を一つの区切りに設定するのは、英語が再び公用語としての地位を回復しはじめた時期であったからである。文献学的思潮という立場からは、中期と晩期の区分は意義があるであろう。

英語学前史につづいて、英語学史（1500—1980）はつぎの二つの大区分が適当である。

年代	1500 — 1780	1780 — 1980
英語学史	近代英語学史 + 現代英語学史	

英国の文芸復興期（1500—1660）と擬古典主義もしくは啓蒙思想期（1660—1780）と称される時期は、「近代」として一括して取り扱う。近代期の終末は、世紀の区切りとしての1800年が普通である。しかし、英国の文芸思想のなかで、ローマン主義の源流や印欧語比較言語学の起源的な見解の勃興を考慮に入れるならば、時期を少し遡って、1780年と定めてよいであろう。

かくして、近代英語学史はつぎの二つの区分によって、その思潮を展望することができる。

B. 近代期〔1500—1780〕

(II) 近代英語学史・初期

1. 前期 — 人文主義運動と文献学 (1500—1600)
2. 後期 — 英語学の勃興 (1600—1660)

(III) 近代英語学史・晩期

1. 前期 — 新古典主義と合理主義 (1660—1710)
2. 後期 — 文献学的權威の要望 (1710—1780)

英国近代期の文献学を特色づけるものは、科学的な研究方法への志向が顕著になりはじめたことである。16世紀から本格的な英語研究が文芸復興期の一般文献学的傾向のなかに重要な位置を占めることになる。この時期の初期を(1500—1660)に限定するのは、王政復古(1660)の政治的事件による清教徒革命が終結したことによる。この初期の中間の時期を1600年に定めるのは、エリザベス一世の死(1603)および最初の英語辞典(1604)、ならびに『欽定英訳聖書』(1604—1611)の文献学的著作による。

近代英語学史・晩期のなかで、その後期の発端として、一応1710年を設定している。文芸史的には詩人で英語散文の確立者ジョン・ドライデンの死(1700)が世紀の変わり目であるために、この年代を中間時期とすることも一案であろう。しかし、政治的にはアン女王の死(1714)によりハノーヴァー王朝(ジョージ・二・三世～ヴィクトリア女王即位1837年まで)が始まるのが重要な時期区分の理由となる。また、英語学史的には、カージの英語辞典(1708)、スウィフトのアカデミー設立のための『提案書』(1712)やブライトランドとグリーンウッドの英文典(1711)により、1710年を中間時期と見なすことができる。

最後に、現代英語学史の200年は、つぎの2大区分、つまり「現代初期」と「現代」(もしくは「現在」)とするのが有意義である。

C. 現代期〔1780—1980s〕

(IV) 現代初期英語学史

1. 前期 — 史的比較言語学の隆盛 (1780—1830)
2. 後期 — 歴史的原理による英語学 (1830—1880)

現代英語学史の出発は、歴史的原理による印欧語の比較文法の研究からであるとするのが一般の定説になっている。すなわち、英国人のウィリアム・ジョーンズによりサンスクリットと古代ギリシア語・ラテン語とが共通の祖語から由来したとする講演(1786)は、この研究の起源とされている。さらに、シェリダン(1780)とウォーカー(1791)の英語発音辞典、ウェブスター(1784)とクート(1788)の英文法、ツックの*Diversions of Purley*(1786)等の文献学的著作は、新しい言語研究への転換期に位置するものである。世紀の区分1800年より約20年遡って現代期の初期を設定することは有益であろう。科学としての歴史的比較言語学がドイツ人や北欧の学者たち、シェ

レーゲル (1808), ラスク (1814, 1818), グリム (1819, 1822) により進められたことは、注目される。

現代初期の英語学史の経過のなかで1830年がちょうどその中間時期である。ヨーロッパ大陸の学者による印欧語比較言語学の発達が英国に影響を及ぼし、新しい研究方法が英語文献に適用された。ソープによるラスクの *Grammar of the Anglo-Saxon Tongue* (1830) の英訳本は、古期英語研究をして科学的基盤に立たしめた最初の文献である。ソープとともにケンプルによる古期英語文献の編集・刊行は、19世紀後半の文献学の隆盛への強い刺激となった。この時期に、文献学的研究と活動を促進する目的で「英国言語学会」(ロンドン大学, 1830—), 「カムデン学会」(1838—), 「チャーサー学会」(1868—) 等が設立され、多くの古期・中期英語文献ははじめて写本から刊本の形で提供されることになった。一方、リチャードソンの英語辞書(1836), トレンチの『英語辞書の欠陥』(1857) 等により大型辞書の編集への気運は高まった。そして、言語学会の蒐集した資料により、マレー等により N. E. D. (後には OED) の編集が進められ、英国最大の文献学的事業は軌道に乗ったのである。

現代期のなかでの「現在」の英語研究を含む時期は、つぎのように区分することができる。

(V) 現代英語学史

1. 前期 — 記述主義・構造主義 (1880—1920)
2. 後期 — 構造主義の隆盛 (1920—1955)
3. 現在 — 諸種の言語理論 (1955—現在)

歴史的原理による英語研究と伝統的な文献学の隆盛につづいて、現代の英語学史はパウルの *Prinzipien der Sprachgeschichte* (1880) よりはじまるとしてよい。クルチュース、レスキーンの影響を受け、彼はシーフェルス、スウィート、フィエトル等とともに、いわゆる「青年文法家」として新しい言語研究の発達をうながした。彼等の主張の一部として、現代語の観察を基礎とし、音声と文字を峻別するという考え方は英国のスウィートが実践することになった。パウルの書に先立って、スウィートの“Word, Logic, and Grammar” (1876) と *Handbook of Phonetics* (1877) は、すでにいわゆる「記述主義」の原理に基づいて、真に科学的な英語学の出発を示すものであった。スウィートの *A New English Grammar* (1891, 1898) と *History of English Sounds* (1888) により、その歴史的面と記述的面において、英語学は方法論的に確立され、将来の展開を約束したと見てよい。

20世紀に入って、まず伝統的な英文法の研究は、イエスベルセン(デンマーク)、ポーツマ(オランダ)、クルイシンハ(オランダ) 等大陸の学者により集大成された。歴史的研究とともに記述主義的方法による言語構造の研究法と原理は、アメリカにおいては人類学者フランツ・ボーアズの *Handbook of American Indian Languages* (1911), ヨーロッパ大陸ではフェルディナン・ド・ソシュールの *Cours de linguistique générale* (1916) により示され、欧米の言語研究に絶大な影響を与え、構造主義的特質を持つにいたった。

1920年代は、言語研究における構造主義の隆盛を見た特筆すべき時期であった。この時期以後には、英語研究は単に英語学のみの世界の問題ではなくなり、広く言語研究一般のなかで取り扱うことが余儀なくされるにいたった。英国においては、スウィート、ウィルドの伝統による英国学派音声学がジョーンズによって発展させられた。この伝統は、さらにウォードやパーマーにより受け継がれた。一方、アメリカにおいては、ボーズの弟子サピアにより、*Language* (1921) と“*Sound Patterns in Language*” (1925) がアメリカ構造主義言語学の基礎をなし、ブルームフィールドの*Language* (1933) により、その原理と方法論は確立した。ブロック、トレーガー、スミス、ハリス、ホケット等の主流と、フリーズ、パイク等によるミシガン学派によりアメリカ言語学は発展した。

ウィルドの英語音声史論 (1920) とオグデン・リチャードの意味論 (1923)、ガーディナーの『言葉と言語の理論』 (1932) の研究は、この時期の顕著な業績である。マリノスキーによる民族学的言語研究も1920～23年ごろに始まり、ファースに影響を及ぼし、スウィート、ジョーンズの伝統に続くことになった。ファースの*Speech* (1930) とその言語論集 (1934～1951) および第2言語論集 (1952～59) は、いわゆるロンドン学派言語学派の原理を確立することになった。ハリディー、ロウビンズ、F. R. パーマー、ヘンダーソン、アレン等によりこの言語学は発達させられた。

最後に、現在の英語学史 (1955～1980s) は、種々の言語理論の適用によりその複雑な様相を呈しているのが実情である。アメリカ構造主義言語学は、音素論と形態素論において優れた研究成果を挙げた。その統語論において行きづまっていた情況は、チョムキーの出現 (1955の論文と1957年の*Syntactic Structures*) により、変形生成文法が革命的な衝激を英語学・言語学の分野のみならず、心理学・言語習得論・哲学の世界に与えた。アメリカにおけるパイクの文法素論とラムの成層文法論、欧米における語用論の発達など、言語理論は複雑化し、多様化している。ロンドン学派の言語理論に基づく現代英語文法の着実な研究はクワーク、グリーンボーム等により進められている。

III. 英語学史年表 (c. 800—1980s)

凡 例

1. 「英国史」 英国の政治的・社会的な事件・情勢に関して、主要なものに限って記録している。
2. 「英語史」 英語の発達各時期の特徴を記すにとどめ、英語史の事情・事件の主要なものは「主要文献」の項のなかでも説明している。
3. 「思潮」 英語学史の各時期・時代の文献学的・文化的な全般的思想の流れを記している。
4. 「主要文献」 著者名は片仮名にて、書名は原語（英語・ラテン語等）で記す。特に、英文法書・辞書・綴字発音論・英語改良論等を中心として、英語文献の代表的なものを示している。現代期に関しては、言語学に係わる内容の書も載せている。
5. 「思想類型」 各時期の「思潮」のなかの特徴的な傾向、もしくは「思潮」を形づくるにいたった思考・意識・心的態度・評価等を示している。

記 号

- 英語学史的な主要文献。
- ◎ 上記のなかで特に重要で、各時期を代表する文献。
- △ 英国以外の、ヨーロッパ大陸で著わされた主要文献および主要な歴史的イベント。
- 英語史的・英語学史的な事件・事情・運動。
- * アメリカ合衆国で著わされた文献。
- 英国史上の重要な事件。

I 英語学前史 (c. 800-1500)

英国史	英語史 (特徴)	英 語 学 史			
		思潮	主要文献	思想類型	
<p>古</p> <p>代</p> <p>■シーザー英国侵入 (55, 54B. C.)</p> <p>■ローマ軍撤退 (410)</p> <p>■ローマ帝国滅亡 (476)</p>				<p>△ディオニシウス・スラックス, <i>Technē grammatikē</i> (100B. C.)</p> <p>△ウァルロ, <i>De Lingua Latina</i> (100B. C.)</p> <p>△キケロ (106-43 B. C.)</p> <p>△ローマ皇帝オーガスタス・シーザー (27BC. -14A. D.)</p> <p>△イエス・キリスト (c. 4B. C. -c. 30)</p> <p>△クインティリアヌス, <i>Institutio oratoria</i> (1 C.)</p> <p>△ウルフィラ, ゴート語訳新約聖書 (4 C.)</p> <p>△ドナツス, <i>Ars grammatica</i> (4 C.)</p> <p>△ジェローム, 『ウルガタ訳聖書』 (5 C.)</p>	ラテン文芸オーガスタス時代
<p>中</p> <p>世</p> <p>■アングル・サクソン族英国侵入 (449-547)</p> <p>■デーン人侵入 (787-855)</p> <p>■ノルマン人征服 (1066)</p>	<p>500</p> <p>古期英語 (完全屈折)</p>	<p>早</p> <p>期</p> <p>英語研究の萌芽</p>	<p>△プリスキアヌス, <i>Institutiones grammaticae</i> (6C.)</p> <p>□オーガスティン, キリスト教布教 (597)</p> <p>○英語最古文獻・Charters の英語</p> <p>○口伝 <i>Beowulf</i> 成立 (c. 725)</p> <p>○ビード, 『英国民教会史』 (731)</p> <p>◎コーパス注解集 (8 C. 末)</p> <p>○アルフレッド大王, ラテン語文獻英訳 (9 C. 末)</p> <p>○ウエスト・サクソン訳聖書 (c. 1000)</p> <p>△ライデン・エアファート注解集 (9 C. 末)</p> <p>◎エールフリック, ラテン文典 (11C. 初)</p>	英語の認識 注解記入・注解集編集	
<p>(カトリック主義・封建主義の時代)</p> <p>■十字軍 (1095-1272)</p> <p>■ジョン王ノルマンディ失う (1204)</p> <p>■大憲章 (1215)</p> <p>■男爵戦争 (1258-65)</p> <p>■英仏百年戦争 (1337-1453)</p> <p>■黒死病 (1348-50)</p> <p>■バラ戦争 (1453-85)</p> <p>■チュードル期・ヘンリーⅧ世 (1485-)</p>	<p>1100</p> <p>語彙・統語法の大変化</p> <p>中期英語 (屈折水準化)</p> <p>大母音推移</p> <p>文書・文章英語の勝利 (1422-89)</p> <p>1500</p>	<p>中</p> <p>期</p> <p>英語研究の停滞</p> <p>1300</p> <p>晩</p> <p>期</p> <p>文献学の曙光</p>	<p>○アングロ・サクソン年代記終り (-1154)</p> <p>□オックスフォード大学の基礎 (1167)</p> <p>○『アングロ・サクソン類語集』 (12C. 13C.)</p> <p>◎ガーランド, <i>Dictionarius</i> (13C.)</p> <p>○オーム, <i>Ormulum</i> (1210)</p> <p>△アルバート, <i>De Modis Significandi</i> (1240)</p> <p>□オックスフォード, University College 創立 (1249)</p> <p>□ケンブリッジ, Peterhouse College 創立 (1284)</p> <p>□英語再確立の傾向</p> <p>○コーンウォール, <i>Speculum grammaticale</i> (1346)</p> <p>□英国議會、英語で開会 (1362)</p> <p>○ウィックリフ, 英訳聖書 (1382)</p> <p>□文法学校, 授業は英語 (1385)</p> <p>○チョーサー, <i>Canterbury Tales</i> (1387-)</p> <p>○チョーサーの死 (1400)</p> <p>□遺言状はすべて英語 (1400-)</p> <p>□議會記録は英語 (1423-)</p> <p>□文章に英語使用の一般化 (1425-)</p> <p>◎ガリフリデス, <i>Promptorium parvulorum</i> (c. 1440)</p> <p>□都市法律は英語, フランス語廃止 (1450)</p> <p>□カクストン印刷術導入 (1476)</p> <p>○カクストン翻訳 (1476-90)</p> <p>○スタンブリッジ, <i>Vulgaria</i> (1496)</p> <p>○Anon., <i>Ortus vocabulorum</i> (1500)</p>	<p>フランス・ラテン語重視</p> <p>主別類語集(思弁文法隆盛)</p> <p>フランス語衰退</p> <p>文書英語確立</p> <p>粗野な英語</p> <p>ラテン語辞書編集</p>	

II 近代英語学史—初期 (1500—1660) (i)

英国史		英語史 (特徴)	英語学史		思想類型
			思潮	主要文献	
近代 (文芸復興・宗教改革の時代)	<p>■ヘンリーⅧ世 (1509—47)</p> <p>語彙増大運動 (スケルトン・エリオット)</p> <p>「インキ」壺用語論争</p> <p>近代初期綴字法定る</p> <p>■エリザベス女王 (1558—)</p> <p>初期・近代英語 (屈折ほぼ消失)</p> <p>■スペイン艦隊破る (1588)</p> <p>■東インド会社 (1600)</p> <p>■エリザベス女王の死 (1603)</p> <p>■ヴァージニア植民 (1607)</p> <p>■英国内乱 (1642)</p> <p>■共和国 (1649—60)</p>	<p>1500</p> <p>語彙増大運動 (スケルトン・エリオット)</p> <p>「インキ」壺用語論争</p> <p>近代初期綴字法定る</p> <p>初期・近代英語 (屈折ほぼ消失)</p> <p>■エリザベス女王 (1558—)</p> <p>初期・近代英語 (屈折ほぼ消失)</p> <p>■スペイン艦隊破る (1588)</p> <p>■東インド会社 (1600)</p> <p>■エリザベス女王の死 (1603)</p> <p>■ヴァージニア植民 (1607)</p> <p>■英国内乱 (1642)</p> <p>■共和国 (1649—60)</p> <p>1660</p>	<p>前</p> <p>人文主義運動と文献学 [1550]</p> <p>期</p> <p>後</p> <p>英語学の勃興</p> <p>期</p>	<p>□エラスムス・ギリシア語講義 (ケンブリッジ, 1511)</p> <p>△ルーテル, 宗教改革宣言 (1517)</p> <p>○パークレー, <i>Introductory</i> (1520)</p> <p>△ルーテル, ドイツ語訳聖書 (1522—34)</p> <p>○ティンダル, 『英訳聖書』(1526—35)</p> <p>○ポールズグレーブ, <i>Lesclarcissement</i> (1530)</p> <p>□ワイヤット・サリー, イタリア・ソネット導入 (1536—47)</p> <p>○カヴァーディル『英訳聖書』(1535)</p> <p>◎エリオット, <i>Dictionary</i> (1538)</p> <p>○リリー他, <i>Shorte Introduction</i> (1546)</p> <p>○ペール, <i>Scriptorium Summarium</i> (1548)</p> <p>○克蘭マー, 『一般祈祷書』(1549)</p> <p>◎ウイルソン, <i>Arte of Rhetorique</i> (1553)</p> <p>○トッテル, <i>Miscellany</i> (1557)</p> <p>○ホイッティンガム, <i>Geneva Bible</i> (1560)</p> <p>○パーカー, <i>Bishops' Bible</i> (1568)</p> <p>○ハート, <i>Orthographie</i> (1569)</p> <p>○レヴィンズ, <i>Manipulus vocabulorum</i> (1570)</p> <p>○バレット, <i>Alvearie</i> (1573)</p> <p>○ブロッカー, <i>Booke at Large</i> (1580)</p> <p>○パトナム, <i>Art of English Poesie</i> (1581)</p> <p>◎マルカスター, <i>Elementarie</i> (1582)</p> <p>◎ブロッカー, <i>Pamphlet for grammar</i> (1586)</p> <p>○カムデン, <i>Britannia</i> (1586)</p> <p>○グリーヴス, <i>Grammatica Anglicana</i> (1594)</p> <p>○クート, <i>School-maister</i> (1596)</p> <p>○フロリオ, <i>Worlde of Wordes</i> (1598)</p> <p>1600</p> <p>○キャンピオン, <i>Observations in the Art of E. Poetry</i> (1602)</p> <p>○ダニエル, <i>Defence of Rhyme</i> (1603—7)</p> <p>◎コードリー, <i>Table Alphabetical</i> (1604)</p> <p>◎アンドリュース, 『欽定英訳聖書』1604—1611)</p> <p>○コットグレーヴ, 仏英辞典 (1611)</p> <p>△クルスカ・アカデミー辞典 (1612)</p> <p>□シェイクスピアの死 (1616)</p> <p>○ブロッカー, <i>English Expositor</i> (1616)</p> <p>○ギル, <i>Logonomia Anglica</i> (1619)</p> <p>○コッケラム, <i>English Dictionarie</i> (1623)</p> <p>□シェイクスピア, <i>First Folio</i> (1623)</p> <p>○スベルマン, <i>Glossarium Archaologicum</i> (1626)</p> <p>○バットラー, <i>English Grammar</i> (1633)</p> <p>△フランス・アカデミー創立 (1635)</p> <p>*ハーバード大学創立 (1636)</p> <p>○ジョンソン, <i>English Grammar</i> (1636, 1640)</p> <p>□劇場閉塞 (1642)</p> <p>◎ウォリス, <i>Grammatica Ling. Anglicanae</i> (1653)</p> <p>○プラント, <i>Glossographia</i> (1656)</p> <p>○ロドウィック, <i>Common Writing</i> (1657)</p> <p>○ベック, <i>Universal Character</i> (1657)</p> <p>○フィリップス, <i>New World of Words</i> (1658)</p>	<p>英語非難 (語彙貧弱・未洗練)</p> <p>ラテン文法のモデル</p> <p>英語純粋主義論</p> <p>英文法の発生</p> <p>英語非難・賞賛</p> <p>英英辞書の成立</p> <p>英語賞賛</p> <p>普遍的字母論</p> <p>英語文法の確立</p>

III 近代英語学史—晩期 (1660—1780) (ii)

英国史	英語史 (特徴)	英語学史		思想類型	
		思潮	主要文献		
近代 (理性主義・啓蒙思想期)	■王政回復 (1660) ■劇場再開 (1660) ■疫病・ロンドン大火 (1665—6) ■名誉革命 (1688)	1660 ドライデン散文 (1668—) 後期・近代英語 (權威ある英語) 英国小説散文 (1740—70)	前 新古典主義 期 [1700]	□英国学士院設立 (1660) △ランスロウ・アルノウ、『ポール・ロワイヤル文法』(1660) □英語改良委員会任命 (1664) ◎ウィルキンズ, <i>Essay towards a Real Character</i> (1668) ○ホウルダー, <i>Elements of Speech</i> (1669) ○スキナー, <i>Etymologicon Linguae Anglicanae</i> (1671) ○フランス, <i>Etymologicum Anglicanum</i> (1677; ライ, 1743) ○クーパー, <i>Grammatica Linguae Anglicanae</i> (1685) ○ロドウィック, <i>Universal Alphabets</i> (1686) □ボープ (1688—1744) 新古典主義の代弁者 ○ヒックス, <i>Institutiones Grammaticae Anglo-Saxonicae</i> (1689) ○ロック, <i>Essay concerning Human Understanding</i> (1690) △フランス・アカデミー辞典 (1694) ○デイフォウ, <i>Essay upon Projects</i> (1697) ＊イエイル大学創立 (1701) ○ビッシュ, <i>History of E. Poetry</i> (1702) ○ヒックス, <i>Thesaurus Grammatico-criticus & Archaeologicus</i> (1703—5) ○ハリス, <i>Lexicon Technicum</i> (1704) ◎カージー, <i>New English Dictionary</i> (1706) ○カージー, <i>Dictionarium Anglo-Britannicum</i> (1708)	普遍文法 英語アカデミー思想
	■スコットランド併合 (1706) ■アン女王死 (1714) ■英仏開戦 (1744) ■インド征服 (1757) ■仏領ケベック占領 (1759) ■アメリカ合衆国独立 (1776)	植民地からの言葉流入 大母音推移完了 1780	後 文献学的權威の要望 期 [1755]	1710 ○グリーンウッド, <i>Practical English Grammar</i> (1711) ○ブライトランド, <i>Grammar of E. Tongue</i> (1711) ○マテュール, <i>English Grammar</i> (1712) ○スウィフト, <i>Proposal</i> (1712) ◎ベイリー, <i>Universal Etymological E. Dictionary</i> (1721) ○チェインバース, <i>Cyclopaedia</i> (1728) ○ジュニアス (ライ) <i>Etymologicon</i> (1743) ＊プリンストン大学創立 (1746) ○ハリス, <i>Hermes</i> (1751) △デイドロー他, <i>Encyclopédie</i> (1751—65) □大英博物館創立 (1753) ＊コロンビア大学創立 (1754) ◎ジョンソン, <i>Dictionary of the E. Language</i> (1755) ○ブリーストリー, <i>Rudiments of E. Grammar</i> (1761) ○ブリーストリー, <i>Lectures on the Theory of Language</i> (1762) ○ラウス, <i>Short Introduction</i> (1762) ○ウォード, <i>Essay on Grammar</i> (1765) ○パーシー, <i>Reliques of Ancient English Poetry</i> (1765) ○『ブリタニカ百科辞典』初版 (1768—71) □ウォートン, <i>History of English Poetry</i> (1774—81) ○ティリット, <i>Canterbury Tales</i> (1775) ○ギボン, <i>Decline and Fall of the Roman Empire</i> (1776, '81, '88) ○ステイール, <i>Prosodia Rationalis</i> (1775) ○モンボドウ, <i>Origin and Progress of Language</i> (1773—92) ○キャンベル, <i>Philosophy of Rhetoric</i> (1776)	英語研究の文法 英語語彙の統制 英語発音標準化 規範英文法・修辞学隆盛 歴史主義傾向

IV 現代初期英語学史 (1780—1880)

英国史	英語史 (特徴)	英 語 文 献			
		思潮	主要文献	思想類型	
現代 初期	1780 ■インドに監 督局 (1784) ■ワシントン 初代大統領 (1789) ■フランス革 命(1789—99) ■英仏開戦 (1803) ■トラファル ガー戦(1805) ■ウォータールー 戦 (1815)	規範的英語 から 成熟英語へ	前 期	<p>史的比較 言語学の 隆盛</p> <p>[1800</p> <p>○シェリダグ, <i>General Dictionary</i> (1780) ○ツック, <i>Diversions of Purley</i> (1786) ○ジョーンズ, アジア学会講演 (1786) ○ウォーカー, <i>Critical Pronouncing Dictionary</i> (1791) ○ペンシルバニア大学創立 (1791) ○マリー, <i>English Grammar</i> (1795) *ジョンソン, <i>School Dictionary</i> (1798) □ワーゾワス・コウルリッジ, <i>Lyrical Ballads</i> (1798) *ウェブスター, <i>Compendious Dictionary</i> (1806) ○トッド, ジョンソン辞典改訂 (1818) △ラスク, <i>Undersøggelse</i> (1818) △グリム, <i>Deutsche Grammatik</i> (1818, '22) ○ハント, <i>Syntax of E. Language</i> (1823) ○コベット, <i>Grammar of E. Language</i> (1823) ○ボズワース, <i>Anglo-Saxon Grammar</i> (1823) *ウェブスター, <i>American Dictionary</i> (1828)</p>	印欧語比較文法の影響 (文芸上のローマン主義)
	<p>現代英語 (成熟英語) 小説散文隆盛 (1833—70)</p> <p>■ヴィクトリア女王 (1837—1901) ■郵便制度 (1840) ■鉄道輸送 (1845) ■進化論 (1859) ■米国南北戦争 (1861—5) ■英国女王 インド帝と称 す (1876) ■電話発明 (1876)</p> <p>1880</p>	現代英語 (成熟英語) 小説散文隆盛 (1833—70)	後 期	<p>1830</p> <p>○ソープ訳, ラスク <i>Anglo-Saxon Grammar</i> (1830) *ウスター, <i>Compendious & Explanatory Dictionary</i> (1830) ○ケンブル, <i>Beowulf</i> (1833) ○ソープ, <i>Analecta</i> (1836) □ロンドン大学創立 (1836) ○リチャードソン, <i>New Dictionary</i> (1836) ○ゲスト, <i>History of English Rhythms</i> (1836) ○ボズワース, <i>Dictionary of A. S. Language</i> (1838) □カムデン学会 (1838—) □英国言語学会 (1842—) [1850 ○ブラウン, <i>Grammar of E. Grammars</i> (1851) ○オギルヴィー, <i>Imperial Dictionary</i> (1851) ○トレンチ, <i>Study of Words</i> (1851) ○ロージェイ, <i>Thesaurus of E. Words</i> (1852) △グリム, <i>Deutsches Wörterbuch</i> (1854—) ○トレンチ, <i>Deficiencies of Our Dictionaries</i> (1857) □NED(OED) 編集開始 (1858—) ○コウルリッジ, <i>Proposal for NED</i> (1859) *ウスター, <i>Dictionary</i> (1860) *ウェブスター・ポーター, <i>American Dictionary</i> (1864) ○オルフォード, <i>Queen's English</i> (1864) □ファーニヴァル, EETS (1864—) ○ベル, <i>Visible Speech</i> (1867) *ホイットニー, <i>Study of Language</i> (1867) ○ムーン, <i>Dean's English</i> (1868) □英国方言学会創立 (1873—) ○エリス, <i>Early E. Pronunciation</i> (1869—89) △フェルネル, <i>Ausnahme</i> (1875) *ホイットニー, <i>Life & Growth of Language</i> (1875) ○スウィート, "Words, Logic and Grammar" (1876) ○スウィート, <i>Handbook of Phonetics</i> (1877)</p>	<p>歴史言語学の隆盛 古期英語の科学的研究</p> <p>文献学の隆盛 (各種学会の創立)</p> <p>青年文法家 記述主義の萌芽</p>

V 現代英語学史 (1880—1980s) (i)

英国史	英語史 (特徴)	英語学史		
		思潮	主要文献	思想類型
現代 (科学技術・原子力の時代)	1880 1890—1910 1914—18 1939— 1945 1948 1955	前	<p>△パウル, <i>Prinzipien der Sprachgeschichte</i> (1880)</p> <p>◎マレー, <i>NED (OED)</i> 第I巻 (1888)</p> <p>◎スウィート, <i>History of English Sounds</i> (1888)</p> <p>*ホイットニー, <i>Century Dictionary</i> (1889—91)</p> <p>○ライト, <i>E. Dialect Dictionary</i> (1896—1905)</p> <p>◎スウィート, <i>New E. Grammar</i> (1891, '98)</p> <p>○スウィート, <i>Practical Study of Language</i> (1899)</p> <p>○ファンク, <i>Standard Dictionary</i> (1893—94)</p> <p>○アニオンズ, <i>Advanced E. Syntax</i> (1904)</p> <p>○ブラッドリー, <i>Making of English</i> (1904)</p> <p>○ポーツマ, <i>Grammar of Late Mod. English</i> (1904—26)</p> <p>○クルイジンガー, <i>Handbook of Presentday E.</i> (1909)</p> <p>○イエスベルセン, <i>Modern E. Grammar</i> (1909—49)</p> <p>○ファウラー, <i>King's English</i> (1906)</p> <p>○ファウラー, <i>COD</i> (1911)</p> <p>◎ポーアズ, <i>Handbook of American Ind. Languages</i> (1911)</p> <p>□SPE (純正英語協会) 設立 (1913)</p> <p>△ソシュール, <i>Cours de linguistique générale</i> (1916)</p> <p>○ソンシン, <i>New E. Grammar</i> (1916)</p> <p>○ジョーンズ, <i>E. Pronouncing Dictionary</i> (1917)</p> <p>○ジョーンズ, <i>Outline of E. Phonetics</i> (1918)</p>	<p>科学的英語学</p> <p>科学的伝統文化</p> <p>伝統文法資料の集大成</p> <p>人類学的言語学の起源</p> <p>音素概念の発達</p>
		後	<p>1920</p> <p>○ワイルド, <i>Mod. Colloquial English</i> (1920)</p> <p>*サピア, <i>Language</i> (1921)</p> <p>○オグデン・リチャーズ, <i>Meaning of Meaning</i> (1923)</p> <p>○イエスベルセン, <i>Philosophy of Grammar</i> (1924)</p> <p>○パーマー, <i>Grammar of Spoken English</i> (1924)</p> <p>◎サピア, "Sound Patterns" (1925)</p> <p>*アメリカ言語学会誌 <i>Language</i> (1925—)</p> <p>○クレーギー, アニオンズ, <i>OED</i> 完結 (1928)</p> <p>○ファース, <i>Speech</i> (1930)</p> <p>*カーム, <i>Syntax</i> (1931)</p> <p>◎ブルームフィールド, <i>Language</i> (1933)</p> <p>*クレーギー・他, <i>Dictionary of American English</i> (1938—43)</p> <p>△ツルベツコイ, <i>Grundzüge der Phonologie</i> (1939)</p> <p>*フリーズ, <i>American E. Grammar</i> (1940)</p> <p>*ブロック・トレーガー, <i>Linguistic Analysis</i> (1942)</p> <p>△イエームスレウ, <i>Sproateoriens</i> (1943)</p> <p>*バイク, <i>Phonetics</i> (1943)</p> <p>1945</p> <p>*ナイダ, <i>Morphology</i> (1946)</p> <p>*バーンハート, <i>American College Dictionary</i> (1947)</p> <p>*マッシュューズ・他, <i>Dictionary of Americanism</i> (1951)</p> <p>*ハリス, <i>Methods in Structural Linguistics</i> (1951)</p> <p>*トレーガー・スミス, <i>English Structure</i> (1951)</p> <p>*ナイダ, <i>A Synopsis of English Syntax</i> (1951)</p> <p>○ヤコブソン・ハレ, <i>Preliminaries to Speech Analysis</i> (1952)</p> <p>*バイク, <i>Language</i> (1954—60)</p>	<p>形態素論の発達</p> <p>音素(音韻)論の確立</p> <p>統語論の模索</p> <p>言語研究の世界的交流</p>

VI 現代英語学史 (1880—1980s) (ii)

英国史	英語史 (特徴)	英語学史		
		思潮	主要文献	思想類型
現代	1955	現	<ul style="list-style-type: none"> *ホケット, <i>Manual of Phonology</i> (1955) ○ヤコブソン・ハレ, <i>Fundamentals of Language</i> (1956) ◎ファース, <i>Papers in Linguistics 1934—1951</i> (1957) ○ドブソン, <i>English Pronunciation</i> (1957) *ジョーズ, <i>Readings in Linguistics</i> (1957) ◎チョムスキー, <i>Syntactic Structures</i> (1957) *ホケット, <i>Course in Modern Linguistics</i> (1958) *ヒル, <i>Introduction to Linguistic Structures</i> (1958) ○ウルマン, <i>Principles of Semantics</i> (1959) ○ハリディー, "Categories of the Theory of Grammar" (1961) *ゴーズ, <i>Webster 3rd</i> (1961) ◎オースティン, <i>How to Do Things with Words</i> (1962) △ヴィッサー, <i>Historical Syntax</i> (1963—73) *チョムスキー, <i>Aspects of the Theory of Syntax</i> (1965) ◎ラム, <i>Outline of Stratificational Grammar</i> (1966) *スタイン, <i>Random House Dictionary</i> (1966) *チョムスキー・ハレ, <i>Sound Patterns of English</i> (1968) *ワトソン, <i>Longman Mod. E. Dictionary</i> (1968) *フィルモア, "The Case for Case" (1968) ○サール, <i>Speech Acts</i> (1969) ○クワーク・他, <i>Grammar of Contemporary English</i> (1972) ○フィシュマン, <i>Sociolinguistic Patterns</i> (1972) ○ラボフ, <i>Sociolinguistic Change</i> (1972) ○パーチフィールド, <i>OED新補遺</i> (1972, '76, '82) ○クワーク・グリーンボーム, <i>University Grammar of English</i> (1973) ○ライオンズ, <i>Semantics</i> (1977) ○プロクター, <i>Longman Dictionary of Contemporary English</i> (1978) 	ロンドン学派言語学 構造言語学の総括 変形文法 語用論 成層文法 ロンドン学派文法学 社会言語学
	1980s		在	諸種の文法(書語)理論